カミーユ・ボワテル

ヨブの話

―善き人のいわれなき受難―

L'homme de Hus

コンテンポラリー・サーカスの異端児、

カミーユ・ボワテル待望の再来日!

崩れ落ち、裏切られ、また這いのぼる――
神々しいまでの愚直さは、絶望か、希望か。
『リメディア～いま、ここで』から2年――。
フランス現代サーカスの奇才、カミーユの
鮮烈な幻の処女作
『ヨブの話―善き人のいわれなき受難―』が、初来日!

©Olivier Chambrial

ドレスにおさげ髪を振りみだし、崩れ落ちるがらくたの山を必死に逃げ惑う人物…フランス現代サーカス界、異端の天才、カミーユ・ボワテルが東京芸術劇場に帰ってくる！しかも幻と呼ばれた作品を引っ提げて。

今年、東京芸術劇場に登場する作品が『ヨブの話』だと知った時、私は耳を疑った。思わずカミーユに「嘘でしょう？」と聞き返してしまったくらいだ。おおげさと言うなかれ。『ヨブの話』は、2003年にカミーユが発表したデビュー作であり、当時、あまりの斬新さに関係者の話題をさらい、観るチャンスを得た人は各々の言葉で「何をみたのか」を必死で説明しようとした。が、どう言葉を操っても、この作品を表現できる人などいなかった。

そうこうするうち、ほどなくカミーユの意欲は次の作品の創作へと移り、『ヨブの話』はもう終わった、といって周囲をさらに驚かせる。残されたわずかな写真と映像…作品は伝説になったまま10年以上が過ぎた。

世界中を旅し、記憶とモノを積み上げて創作を続けてきたカミーユが昨年、あらためて処女作を演じると口にしたとき、身近な人間でさえ唖然としたのは言うまでもない。

©Pascal Bessard-Duruiner

原語タイトル『L'homme de Hus』にある「フス Hus」とは、旧約聖書の「ヨブ記」の主人公の住む国である。いかなる受難や試練に遭おうとも、神への忠誠を守り続けるヨブ…終わりのない不条理と、それに抗することなく、ひたすら受け止める強烈なイメージ。

理由もわからず、大小の災難にあいつづけるキャラクターは、カミーユの作品に絶え間なく登場する。目の前に落ちてくるモノから身をかわし、飛び移った先のテーブルは片足が折れ、すべり台となって次なる災難へと導かれる…という無限ループ。

カミーユの創作の源は、おそらく、幼いころから兄妹でサーカスのようなものを路上で見せていたころからずっと続いているのだろう。大人になってからも、彼は「真剣に」遊んでいるように見える。あるワークショップで、廃校になった学校の椅子を何十脚も集めて、参加者たちに、椅子をつかってムーブメントを創るよう指示していた。が、自分自身も夢中になって沢山の椅子を体にからめているうちに、動けなくなってしまった。あれ？本気でからまっちゃった？気づいた参加者たちがあわてて助け舟を出し、ようやく椅子からの「脱出」に成功。苦しさと照れで真っ赤な顔の彼に、皆が笑いの渦になる。

今回の作品に登場する、おびただしい数の架台。舞台上で、あたかも偶然の災難のように崩れ落ちるモノたちをみて、笑いとも叫びともつかぬ声をたてながら、観客は、心で問いかけずにいられない――いったい、どこまでが偶然で、どこまでが予定通りなのだろう？

そしてカミーユ本人はそれには答えずに、にっこりと笑って、ただ、こんなことを言う。

「僕は、笑いの渦が、ふっと消える瞬間が好きなんだ」

文：田中未知子（現代サーカスプロデューサー／瀬戸内サーカスファクトリー代表）

9月30日（金）19:00 10月1日（土）～2日（日）15:00 詳細はP14へ
プレイハウス

構成・演出・振付・出演：カミーユ・ボワテル

チケット発売:8月6日（土）

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
東京都／アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都東京都歴史文化財団）

芸劇dance

勅使川原三郎×山下洋輔

UP（仮）

これは真剣勝負です。

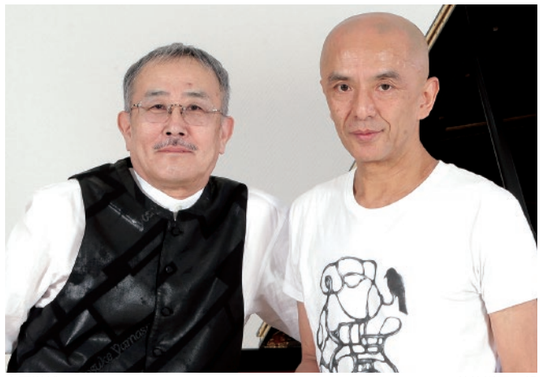
現代ダンスのフロントランナーと
ジャズ・ピアノの巨匠。
世界的に活躍する二人が挑む一期一会の真剣勝負。

山下洋輔のような“カッコよさ”を目指して

ダンスのみならず、オペラや映像など、さまざまなジャンルの表現活動に挑み続ける勅使川原三郎。フリージャズ・ピアニストにして、オーケストラや和楽器との共演にも積極的な山下洋輔。一見すると意外な取り合わせのようにも思えるふたりだが、その出会いには必然があった。

もともと勅使川原は、山下の音楽のファン。ちょうどダンスに興味を持ち始めた時期に、山下洋輔トリオの演奏に出会った勅使川原は、『キアズマ』『寿限無』『木喰（もくじき）』といった伝説的名盤を愛聴し、山下から“カッコよさ”を学んでいったという。「音楽が凄い上に、エッセイもお書きになる、しかも趣味は落語という……。瞬間、瞬間を決して逃すまいとする山下さんの“カッコいい”生き方に、心から共鳴していました。ですから、僕がダンスを始めた時も、山下さんのように“カッコよく”やるしかないと。現在、僕が創作しているダンス作品では、クラシックを使っていることが多いのですが、山下さんの精神はいつも遠巻きに感じています」。

昨年4月、勅使川原は新宿ピットインで開催されたライブパフォーマンスで山下と初共演を果たした。「ジャズからすれば、まさに勅使川原さんがライブハウスに“乱入”されたわけですが、同じ舞台に立てば、ダンスをしようが、楽器を弾こうが、叫ぼうが、すべて対等の共演者。つまり、その人がいることによって、僕の音楽が生まれる存在なんです。その後味が、すごく楽しかった」と、山下は勅使川原との初共演を振り返る。



山下洋輔　　勅使川原三郎

ただし、ライブハウスという場所の関係上、ダンサーの動きには、どうしても物理的な制約が生じてくる。では、ライブハウスとは異なるプレイハウスのような広い空間を使い、ふたりが再共演を果たしたらどうなるか？ 「幕が開いて、普通に舞台が始まると思ったら、そうはいかないですよ」と、山下は意味深な笑いを浮かべる。

ピアノが生き物になり、音楽が視覚を変える

舞台にあるのは、黒い荒馬のようなピアノ。単なる楽器ではなく、手懐けられることを待っている、怪物のような生き物だ。そんなイメージの中で、ダンスと音楽が出会う今回の共演を、勅使川原は「これは（あらかじめ段取りが決められた、予定調和的な）“芝居”じゃない。真剣勝負です」と説明する。「ライヴという行為そのものが、そのまま“作品”になる。あるいは“パフォーマンス”になっていい。一日ごとに違う形になっていいだろうし、一回ごとに真剣勝負ができれば、こんなに面白いことはない。ですから、音楽とダンスが僕たちの周りの空気を変え、視覚さえも変えていくような」。

そんな勅使川原の挑戦を受けて立つ山下。「そもそも、ダンサーのような、動いている人間がそこにいること自体、面白い。単純な言い方をすれば、相手が右に動けば右手が弾くし、相手がドシンとくれば肘打ちやっちゃうとか。あるいは、相手が攻めてきたら攻め返すのではなくて、わざと音を外したり、どっかに逃げちゃうとか（笑）。人間同士のやり合いって、ありとあらゆることができるんです。ピアノを生き物として扱っていただくことで、僕が今までにない、妙なものに変化していくことができればいいなと」。

現段階では、ショスタコーヴィチのような作曲家の音楽を使ったり、あるいはピアノの鍵盤を叩く寸前で止める“寸止め”の試みなど、さまざまなアイディアが膨らんでいる今回の共演。ピアノが生き物になり、音楽が視覚を変える稀有な瞬間を、我々観客は目撃することになるだろう。

取材・文：前島秀国（サウンド&ヴィジュアル・ライター）
写真：Art Direction ミルキィ・イソベ／Photo 坂口亜耶

10月7日（金）19:30 8日（土）～9日（日）16:00　プレイハウス

構成・振付・照明：勅使川原三郎
出演：勅使川原三郎 佐東利穂子／山下洋輔（ピアノ） ほか

チケット発売:8月6日（土）

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）